所との比較は興味ある示唆の一である。蒙古人の薩滿論はダフール蒙古族中の有識者たる烏爾恭博的氏の「薩瑪論」を譯述紹介されたもので、次の現代蒙古青年の宗教意識の調査と共に、將來に於ける彼等の教化指導上よき參考たり得よう。蒙古文化と漢文化の項に於いては文化傳播に對する民族接觸と文化形相との關係を論考し、この民族に關しては、物質的漢文化が精神的漢文化よりも廣範に且よりよく傳播せることを指摘し、文化構成論への好資料を提供して居る。

第六、漢民族——跳大仙踏査記、跳單鼓と跳大神、儒教と道佛二教、漢民族に於ける職業の貴賤の諸項。

第七、回教徒——滿洲國の回教。

以上簡單な紹介を終へた。滿蒙の地を未だ一度も踏まざる筆者が、Field work に成るこの勞作を机上で批評するが如きは憤むべき業であるばかりでなく、それ自體甚だしく非學究的なことである。異民族の間へ探訪に出かけた經驗を貧しいながらにも持つ筆者は、本書の一葉の踏査地圖をさへ我身につまされて見入ること屢々であつた。些細な數行の報告の裏面に數十里の難行の旅路が横たはつて居ることもあらう。さうした成果を易々と机上で通讀し得ることは何としても感謝すべきである。

本書は二著者の共著であり、またその内容も統一的な體系の下に論述されたものでもなく、一面論文集的な性質を持つものであり、讀者の内にはこの點或は物足らなさを覺えるかも知れない。がそれは著者の將來の論著に期待してよいことであらう。この先導的好著の後につゞくものを、著者からも亦他の新進學徒からも、吾人は期待して止まない。なほ著者が序文に「また東亞文化工作上の基礎的研究のために聊か寄與する所がありとすれば云云」と時局柄持つところの關心を示されて居るが、それは具體的に本書後半の諸篇に於いて提示されて居ると云ふべく、從つて本書は獨り專門學徒への書たるのみならず、廣く現下時代人の參考とすべき好著でなくてはならぬ。(四六倍版本文四一六頁、參考圖錄一〇〇頁、外に地圖、索引、大阪屋號書店發兌、定價拾圓)(三品彰英、横田健一)

國學

——その成立と國文學との關係——

久松潛一著

本居宣長は古文献を讀む態度として、古の眼と今の眼を以てすべき事を說いて居るが、この事は單に古典を讀む方法に於て言つた事のみではなく、その言葉の中には古典が今に生命を有するものである事を指摘してゐるものがある。この事は亦國學自體に就いても言ひ得るものであつて、日本的立場に立つ新しき學問の建設が要請されつゝある今日、國學の研究が重要であるとされる根據は此所に存する。而して近時國學に關する幾多の研究が輩出する所以でもあらう。

勿論此等國學の研究にも諸種の傾向を有する。卽ち、大別すれば國文學史の立場よりするものと、歷史的な立場よりするものと

に分け得るが、後者に於ては更に、國學者傳記集成の如く列傳的な研究があり、近世文化の上に之を精神史的に取扱はんとする方法があり、更には又神道史の立場からするものがあり、國民道德史の中に之を織込まんとするものもある。

此書は著者が從來諸種の雜誌其他に發表した論文を中心として長年の研究の成果を一書にまとめたものであつて、第一章に於ては主として契沖より宣長に至る國學の發展的な經過を、第二章に於てはそれらを通ずる國學の諸傾向、例へばその實踐的傾向や文獻學的研究等を、而して第三章には國文學との關係に就いて述べて居る。

而してこの研究に見られる一つの特色は著者も自ら述べて居る如く、今日の國文學の母胎としての國學を考へんとした點に存するであらう。即ち國學に於ける國語學研究の問題、國學と文獻學等の問題を中心として、單に國文學との關聯に於てのみならず、思想史的な考察を進めてゐる。更に第四章に於て書史的研究をまとめ、從來の國學史研究書の解說、國學の傳統に就いての簡單な略圖を附してある。尤も國學の近世的な意義に就いての歷史的な考察、例へば中世學問との關係、殊に國學者の中世觀（これが國學の古代研究、古典研究の方向を決定するものと考へられるが）等に就いての考察が殆んどなされてゐないのは物足らぬ點もある。しかし乍ら國文學の立場からする組織的な國學の研究として新生面を開くこと多く、穩健にして且創見に富む國學研究の好著であらう。（本文四一二頁、附表―國學傳統略圖、著者論文目錄、索引計一〇頁、至文堂發行、定價四圓）（淸原宣雄）

支那社會史

――支那地理歷史大系第七編――

本書は白揚社が現在刊行中の支那地理歷史大系十卷の內の一卷である。執筆者は四人で、古代南北朝を岡崎文夫博士、隋唐五代宋を那波利貞博士、元朝を有高巖博士、明淸民國を小竹文夫氏が書いて居られる。

この大系はその篇目を見た所では富山房の支那歷史地理叢書とは違つていくらか體系的になつて居て全體としては統一ある如く見えるが、その代り一卷の中に數人の執筆が割り當てられて居て一卷々々の中では餘り統一がある樣には思はれない。この事は私が最近讀んだ本大系第四編の「支那政治史(上)」でも感じた事だが、この支那社會史に於ても大體同樣である。唯本書では叙述の繁簡が執筆者によつて異ること「支那政治史」程ではないし、取り扱はれて居る問題の範圍も「支那政治史」程區々ではない。政治史の場合では例へば軍事外交は政治史の中に入るかどうかさへが人によつて違つて居た程度であるのに對してこの社會史ではそんなにひどい見解の相違は見受けられない。

四人の執筆者の內、有高氏と小竹氏の二人は社會史といふものに對して相當はつきりした概念を持つて居られる。殊に有高氏は社會史研究の立場として社會組織、社會生活、社會問題、社會政策の四つの觀點を明確に擧げ、その觀點から叙述を進めて居られる。小竹氏は全重心を階級問題に置き之を種族關係、政治關係、